る本書の價値を減殺するものではない。世上かかる著書の殆んど無き今日、本書を斯學專攻の人のみならず、廣く一般知識人が上卷と共に併讀されん事を望む次第である。妄言多謝。（昭和十五年十二月古今書院發行　四一八頁　定價四圓）（一六・五）〔岡本信太郎〕

彙　報

史學研究會

例會　五月十七日（土）、午後一時半より文學部陳列館第一教室に於いて開催、折柄豪雨の中にも拘らず參會された多數の聽者は左記の講演に示唆をうけるところ多いものがあつた。

林子平と古川辰　　本學講師　室賀信夫氏

林子平の三國通覽圖說は、カラフト・サハリン別個說その他の誤謬を含み、古川古松軒によつて痛烈に批難せられてゐる。この二人は共に地理に精しい學者であつたが、子平にあつては地理學は彼の政治理想の實踐の基礎として、いはゞ地政學（ゲオポリティク）として取上げられたに對し、古松軒の地理學は文人趣味より出でた雲烟の癖に止まつた。綿密正確な古松軒の記述よりも、却つて杜撰な子平の所說の方が大局の眞實を道破し得たのはこれによるものであらう。樂翁公を遡る子平、古松軒の對立は、古く三宅博士等の論題とせられたところであるが、この問題の回顧は、搖れ動きつゝある地理學界の現狀に何らかの示唆を與ふるものであると信ずる。

紀元二千六百年記念史學論文集刊行

紀元二千六百年のよき年を記念して、本學文學部に於いては史學に關する論文集を編纂刊行することになつたことは、豫て報ず

るところがあつたが、その後著々進捗して去る三月印刷完了、世に問ふことになつた。收載論文五十六篇、菊版一千餘頁の偉容である。

なほ次ぎに目次を掲げる

國　史

天業恢弘　西田直二郎氏
勸修寺家領に就いて　中村直勝氏
鎌倉時代に於ける社會秩序の一考察　藤直幹氏
水の起源に關する古傳　宮地直一氏
中世の武士道と近世の武士道　清原貞雄氏
贈答用としての和紙について　魚澄惣五郎氏
新羅と高句麗　三品彰英氏
法隆寺金堂藥師如來像管見　東伏見邦英氏
山の崇拜と山の神——
　特に山佛教との關聯に就いて　原田敏明氏
聖應大師傳資料の一二に就いて　岩橋小彌太氏
棠酒と膳臣に就いての一考察　加藤竹男氏
外國資本による琵琶湖疏水開鑿の計畫
　京津間疏水計畫の研究第四　寺尾宏二氏
近世寺内町の性質——
　特に和泉國貝塚寺内町について　福尾猛市郎氏
德川家齊公子の諸家相續に就いて　時野谷勝氏
安土桃山時代に於ける思想展開の一考察　岩城隆利氏
生贄の解釋　村山修一氏
近世初期に於ける見聞記述について
　特に文藝的著述を通しての考察　林屋辰三郎氏

東洋史

慧超往五天竺國傳正本　羽田亨氏
蘇莫遮攷　那波利貞氏
毘沙門天信仰の東漸に就いて　宮崎市定氏
金の海陵王燕京遷都の一考察　田村實造氏
察罕編紀年纂要考　石濱純太郎氏
畀溝山行　鷲淵一氏
元の昭宗の年號「宣光」に就いて　神田喜一郎氏
平群廣成等の謁見したる崑崙王——
　林邑 Gangarara 王統の研究　杉本直治郎氏
宋代坊場の民間經營について　曾我部靜雄氏
後魏刑官考　內田吟風氏
滿洲のあなぐら考　今西春秋氏
金世宗即位事情の一考察　外山軍治氏
フランク・發郎・拂菻　藤枝晃氏
海都の叛いた年次に就いて　愛宕松男氏

西洋史

正義—希臘政治原理の一としての——
　シュメール法について——　原隨園氏
楔形文字法の最古法源としての　中原與茂九郎氏

クレテ文明とクレテ美術　村田數之亮氏
カーツーシュに就いて　岡島誠太郎氏
ランケ史學と「機」の問題　千代田　謙氏
資本主義起源の問題　鈴木成高氏
古代末期論—ローマ帝政史序說として　井上智勇氏
Deutcher Partikularismus　西井克己氏
トライチユケ復興　中山治一氏
歷史的概念としての Ancien Régime　前川貞次郎氏

地理學

日本刀劍史の黎明期に於ける大和鍛冶　小川琢治氏
國土計畫と交通　小牧實繁氏
支那水運路の發達とその舟　川上喜代四氏
蝦夷地—その地理學史的意味　藤田元春氏
支那社會の自然的基礎　室賀信夫氏
磁石島小考　米倉二郎氏
世界に於ける米作とその需給關係　野間三郎氏
山城乙訓郡の條里　木村憲治氏
　　吉田敬市氏

考古學

浙江省紹興出土の遺物と其の遺蹟　梅原末治氏
付法藏傳と雲岡石窟　水野清一氏
竪穴式石室構造考　小林行雄氏
滿洲熱河省大名城發見の遼代石棺等について　島田貞彥氏
橿原神宮附近考古學資料の出土分布　末永雅雄氏
百濟文物の溯源に關する一考察　齋藤忠氏

讀史會

新入會員歡迎會　五月三日(土)、午後二時より南禪寺塔頭天授庵に於いて國史專攻新二回生の歡迎會を開き、西田、中村、藤、柴田、東伏見の諸先生以下先輩、學生四十五名出席、折柄の雨に新綠一入濃き庭を鑑賞しつゝ靜かな午後を過して四時半閉會した。

例會　五月十六日(金)　午後六時半より西部構內中央學生集會所階上第一號室に於いて開催。出席者五十名、左記諸氏の講演があつて午後十時會を閉ぢた。

一、近世歷史學の成立とその發展　三回生　北原一敏氏
一、近世の歌舞音曲に現れたる庶民精神　三回生　藻鹽一海氏
一、京都府に於ける社寺什寶調査の概觀
　——特に近時發見せられたる知恩院の善導大師像
　及び高山寺の善妙善女像其他二三の彫像に就いて
　——　文學部囑託　赤松俊秀氏
一、厦門見聞　教授　西田直二郎氏

東洋史談話會

新專攻生歡迎會兼例會　五月六日(土)、午後五時半より樂友會

館に於て開催。宮崎、田村兩教授以下學士、學生二十名出席。會食後自己紹介を行ふ。終つて三、四月の交、中支、北支、蒙疆を旅行した人文科學研究所の小畑龍雄氏から興味深い土產話を聽いて九時半散會。

東方文化研究所公開講演

五月三日(土)、午後一時半より同所講堂に於て開催。

支那神話の一側面　同研究所助手　森三樹三郎氏

滿蒙の薩滿數について　京城帝大教授　文學博士　赤松　智城氏

西洋史讀書會

例　會　昭和十六年度第一回例會を五月五日、二回生歡迎會を兼ね、於樂友會館開催、原教授、井上、村田、前川の三講師を始め參會者二十一名。

一、ヘルデルと歴史　　兼岩　正夫君

地理學談話會

例　會　四月二日(水)、午後一時半より實習室にて考古學談話會と合同して開催。臺北帝大の宮本講師を迎へて左記講演あり、多數の寫眞資料も展示されて興味深かつた。出席者十五名。

海南島の土俗調査談　　宮本　延人氏

例　會　四月十五日(火)、午後三時半より實習室にて。出席者十七名。

タイ國のゴム資源

——その地政學的考察の一片鱗——　　藤野　義明氏

二回生歡迎會　五月五日(月)、午後五時半より樂友會館にて開催。小牧教授、室賀講師、野間講師を始め先輩、學生諸氏の參會あり出席三十一名の盛會。小牧教授は京大地理學教室の沿革を回顧しつゝ專攻生諸君を激勵せられ、終つて潑剌たる自己紹介に移れば和やかな歡談のうちに春宵の歡を盡した。

考古學談話會

考古學談話會では新學年に入つて左記の會合を行ひ何れも盛會であつた。

一、新入生歡迎懇親會　五月七日(水)、午後五時半より樂友會館に於いて新入大學院學生內藤戊申、毛利久兩君、本科二回生、井上常三、及川幸夫兩君、選科一回生、印牧邦雄、坪井清足兩君の歡迎傍々懇親會を開催。出席者梅原教授、東伏見講師、水野、村田兩講師以下教室員二十名。

一、大山柏公爵歡迎懇親會　五月十七日(土)、午後一時より考古學實習室に於いて、上洛中の慶應大學大山柏公爵を圍んで懇親會を開催。談公爵等發掘の東北地方貝塚或は今春梅原教授等發掘の長山列島の貝塚に及び盛會であつた。出席者公爵以下梅原教授、村田講師等教室員十八名。

國史專攻學生九州地方見學旅行

(昭和十五年十二月)

紀元二千六百年、この佳き歳に遇ひて彌々國史研究の決意を固

くした我等はこの年掉尾の擧として臘月のあはたゞしき中を、九州地方見學旅行の途に就いた。藤、柴田兩先生、横田副手及び學生十名の一行であつた。

第一日（十二月二十一日）

この日午後開催せられた讀史會大會終了後直ちに京都驛に駈けつけ午後八時半發、大阪驛にて九時三十五分發の急行列車に乘り替へる。

第二日（十二月二十二日）　博多、太宰府

午前六時四十二分下關着、博多へ直行する。先輩檜垣元吉氏の東道で先づ筥崎宮に詣でる。樓門にかゝつてゐる有名な「敵國降伏」の扁額を仰ぎつゝ拜殿に進み、祓を受けて一同道中安全の祈願をこめる。それより寶物殿に入り遺物、古文書類を拜觀、傳醍醐天皇宸筆紺紙金泥の「敵國降伏」三十七葉（模）の外、永祿八年十月五日附大友宗麟祈願文、慶長年間小早川秀秋並に黑田長政の寄進狀等が注意を惹き、又本殿の傍には觀應元年在銘の石塔龍（重要美術品）元祿十四年の禁斷の石碑等を見學した。次いで西郊、松原の中に元寇防壘の遺址を訪ひ、往昔の國難時に思ひを馳することと少時、午後は九州鐵道で太宰府に向つた。太宰府神社では、本殿に到る途中池上に架せられた反橋の傍、室町時代の建築と言はれる末社志賀社に先づ足が留められる。方一間といふ極めて小さなものであるが、その構造手法には複雜且つ纖細な感覺が織り込まれてゐて室町時代の一特色を如實に看取し得る心地がした。本殿に參拜の後寶物館に足を運ぶと秀吉朱印狀、文祿三年大谷刑部吉繼奉納の神鏡、「當主大鳥居權別當法印信寛、願主筑紫上野介豐臣朝臣廣門本朝勺當坊政重、慶長五庚子年二月吉日九州總官大工平井大炊助藤原種重」の銘ある口鍔等が目についた。こゝを辭し自動車二臺に分乘して觀世音寺に赴く、冬枯の田園の中に境域殆んど舊觀を留めぬ古寺の前に立つと一入荒寥の感を深くする。當公に因む傳說に名ある鐘樓に上り、本堂に入ると薄暗い堂内に聖觀音以下五軀の巨大な佛像が吾等を睥睨するが如く聳立してをり、阿彌陀堂には本尊阿彌陀如來、左右に四天王以下諸佛像が所狹きまで並べられてある。概ね藤原時代及び鎌倉時代の作になる國寶であるが、これらの彫刻によつて與へられる感觸には吾等が平素畿内の古寺に拜するものとは頗る異つたものがある樣に思はれた。往古太宰府廳の盛時に於ける中支文化の地方普及がこゝにその面影をテイピカルに留めてゐると考へられる。寺務所で拜見した鎌倉時代の作と思はれる、舞樂面は内面に應永十年修理の銘が讀まれ、又阿彌陀堂内には大内義隆、陶晴賢、安國寺惠瓊、大友宗麟、細川忠興以下多くの文書が藏せられてゐる。小禪を距てゝ西にある戒壇院は本堂に安置された虛舍那佛（國寶）は藤原末期の作と稱せられ衣文の刻みも明快、西陲の地に珍らしい誠に流麗な佛像であつた。

都府樓址は草枯れた爪先上りの道の兩側稍平坦な所點々として礎石が散見する、大門址、中門址と檜垣氏の說明を伺ひつゝ最後に一段と小高き地點に到る。こゝが卽ち正廳址で三十六箇の礎石を順次に巡ると、往年外交問題の要衝として全筑紫を統轄すべく

こゝに建てられた七間五面正廳の偉觀が偲ばれる。日脚短い師走の空には早や夕靄が迫つてゐた。處々礎石の前に佇んで暫時遥か懷古の想ひを馳せた一行は、こゝから當日最後の見學地水城址に急ぐ。水城とは東西南丘陵を連ねた高さ十數米に及ぶ土堤、太宰府の防備線としてその内部に水を貯へる用に作られたことより出た名と言ふ。現今は國道によつて南北に切斷され、その斷面の土層が露はである。元祿年間發掘にかゝるといふ木樋の古材を吾々は先刻觀世音寺で見ることが出來た。又路の傍には水城關門の礎石が存してゐる。午後六時、既に咫尺を辨じ難くなつた頃國道を疾驅して武藏溫泉延壽館に投ず。夜、終日東道の勞をお願ひした檜垣氏とお別れした。

第三日(十二月二十三日)　佐賀

朝小雨の中を二日市驛に赴く。七時五十九分發、九時二十二分、佐賀着鍋島虎雄氏の御出迎をうけ徒歩にて徵古館に行き、館長千住武次郎氏より一わたりの御説明を承つた後館内陳列品を見學、こゝには流石に鍋島家關係の史料多く、就中朝鮮役に際し鍋島直茂に宛て出兵の用意あるべきことを命じた太閤書狀は興味深く、かの著名な「葉隱」及史料として、山本常朝年譜、愚見集(山本祕書)山本常朝遺書(大祕書)等あり、半兵衛更紗、縣下各地の陶器等の陳列は地方文化の特色をなすものである。館を辭し佐嘉松原兩神社參拜の後、鍋島侯爵邸内庫所に向ふ。岡部瑾一氏の御好意で一行の爲めに豫め選定されてゐた記錄文書類を拜觀、時間に餘裕乏しく、深堀文書の外は充分に披見し得なかつたのは誠に殘念である。が、この文書によつて元寇に關する幾多の史料を見學し又この邊陲の地に於ける吉野朝時代の微妙な動向を物語る史料にも接し興味盡きざるものがあつた。尙席上、縣史編纂に携はれる栗原荒野氏より葉隱精神の御話を承り、多大の感銘を得た。甚食の饗應にあづかつた後同邸を辭去し、午後一時三十一分發列車で長崎に向つた。車窓より有明海また大村灣の風光を樂しみつゝ車中に、先輩西崎憲雄氏の御來訪あり、五時十分長崎着、伏見義夫、菱谷武平兩先輩の御出迎をうけて常盤館に入る。明日の見學に就き打合せをなした後、夜の長崎に異國情調の餘韻を求めて町を逍遥した。

第四日(十二月二十四日)　長崎

昨夜半再び崩れた天候は朝になつても未だ復せず、冷雨の中を菱谷氏の東道で崇福寺より始めて市内の一巡を試みた。長崎は殆んど數年を距てることなく頻繁に見學箇所となり、本誌上その報告が過去幾度も詳細に載せられてゐる。今新に書き加ふべきもの少きを知り、唯簡單にその印象を叙することゝする。

純支那風建築になる崇福寺では、三門といひ鐘鼓樓、大雄寶殿(本堂)といふ全てが絢爛たる青丹の彩色を帶び且つ樣式の珍らしく趣のあること先づ一同の眼をひいた。境内より高島秋帆宅址を遥かに望み、唐人屋敷の址に到つて見學。古圖にエキゾチックな影像を留めてゐる扇形の出島は埋立工事の爲め既に昔の面影なく僅かに一部殘つた堀割の石垣と蘭館址の石標の文字に在りし日の情景が偲ばれるのみ。ゴシック式尖塔の聳える大浦天主堂は雨上

りの室にステンドグラスが映え一入美しい、司教の説明を伺ひ、クリスマスの準備に忙しい堂内を一巡、所謂、日本の聖母像の前に、慶應元年三月十七日、二百有餘年嚴重な禁教下に信教を貫徹した信徒發見の劇的場面を追懐した。別館遺品陳列室には切支丹宗門御改書上（寛政七年）、天草辭典、ピオ九世の日本信徒に對する書狀（一八七一年）等が收められて居た。引返しで鳴瀧町なるシーボルト宅址を訪ね、それより、徒歩春德寺に行く。切支丹宗の總本山トドスオスサントス寺の跡、寛永二十年代官末次平藏の建立にかゝる同寺には、將軍家光、家綱の朱印狀を含む約二十通の春德寺文書の外「末次氏事蹟一班」（一六三八年十一月九日、平戸商館に於いて」なる奥書あり）、天保十一年二月附の「僧俗旅人屈帳等」が藏せられ、尠からず興味をひいた。晝餐は此度の旅行に於いても亦、在長崎諸共濟の御厚情により出和園にて太場支那料理の御馳走にあづかつた。

午後、先づ縣立圖書館を訪ね、館長增田廉吉氏の御説明に耳を傾けた後、別室に導かれ陳列品を觀る。興味富な蒐集史料は何れも、切支丹の禁教迫害の歴史、對外貿易の推移、又黎明期日本に於ける洋學開拓者の並々ならぬ苦心を物語る遺品であつた。長崎古圖並に出島の圖「伊王島御永帳」、「八幡町ころび宗旨帳」、「繪板」、「割符留帳」、「綿打商賣資料文書」、貿易許可證たる「信牌」、「家康朱印奉書」、「安政條約書（原本）」、「ドーフハルマ辭書」、「長崎耶蘇會出版のスピリツトバル」、「平家物語」、「ラテン日本語辭書」、「シーボルト遺品並に關係文獻」、「蘭館繪圖」等がその主なるものであつた。更に書庫を一巡、大部な、「長崎奉行所記錄」、「諫早家日記」、「鄕土史資料」等を瞥見し深い感銘を懷きつゝ館を辭した。それより諏訪神社に參拜、最後の見學地福濟寺の一角に立つて暮色濃き長崎灣頭の景觀を愉しみ、午後五時十八分長崎を後にして島原湊に向つた途中諫早で乘替時間を利し夕食、島原南風樓に着いたのは午後九時であつた。（守田長兵衛記）

第五日（十二月二十五日）　島原、熊本

乘船前の一時間をさいて島原森岳城址の見學の豫定を立て、徒歩約十五分、城址に達し土地の鄕土史家林鐵吉氏の御説明を聞く事を得た。此の地は天正十二年沖田畷の戰の時、島津、有馬の軍が本陣を構へた古戰場である。元和二年松倉豊後守重政が有馬氏の後を承け、此の島原半島を領し、有馬氏の居城、日野江、原、の兩城を毀し、此處に本城を築いた。城廓の構造は内外二重に分れ、外廓は略ぼ長方形、その周圍が一里、塀を廻らし、城門が七箇所、平櫓が三十三箇所あつた。築城者松倉氏は城主である事二代、之に代つた高力氏も二代此の城にをり、その後を松平氏が受けてゐた」と云ふ。現在は本丸址の石垣と雜草もしげき内濠が四周を繞つてをり、天守閣址に立てば眼下有明海のひろ〳〵と開ける彼方には九州本土模糊として連る眺望絶佳の地である。林氏は多數の文書を所持せられるとの事であるが時間の都合上拜見し得なかつた。

再び島原湊へと引き返へし艦て有明丸に乘船、白鷗白波に映えて群れ飛ぶ灣の絶景に快哉を叫びつゝ三角港に到着、こゝで晝食

をしたゝめて、乗車午後二時熊本着、驛頭には先輩の吉本香起氏（西洋史）松村功氏、松山國義氏の御迎へあり、既に一同のために貸切バスの御用意と見學コースに時間を配分したプリント迄作成して下さつてあり、爲にきりつめた熊本半日の豫定は充分能率的なものとなつた。先づ國寶熊本城宇土櫓の見學である。桃山初期と思はれる堅牢壮重な外觀を仰いで中へ入れば、案内掛の少女が階を追ひ、或は清正公御一代活人形、西南役パノラマ、熊本城大模型等の説明につとめる。目についたものとして西南役關係資料、神風連關係遺品、神風連齋藤雅言研究の蘭書類、其他慶長四年八月吉日疏瓦（二ノ天主臺出土）、其他古瓦等である。五階櫓上より熊本市を俯瞰すれば樟の多い森の都は一眸の中に收められ、今夜泊るべき阿蘇の山も見はるかされ旅情切なるものがあつた。宇土櫓を出て左に一の天守閣の石垣を見、くらがり門址をすぎて月見櫓址たる午砲臺に到り再び少憩。引き返へさんとすれば路傍の石に毛彫の如意輪觀音坐像（大永四年七月十二日本願良堂敬白）が目についた。次に加藤神社に詣でて清正公の誠忠を追慕し更に本妙寺へ向つた。

加藤家の菩提寺であり九州に於ける日蓮宗の總本山である。石燈籠立ちならぶ長い參道を行き、中門をくゞらんとすれば三條實美の筆になる淨地廟の額が仰がれ、中に入ると拜殿、その奥に御靈屋があつた。拜殿、その横の籠り堂には參拜者多く裸足で御百度を踏む青年や老婆の姿も見られる。淨地廟を出て左手には後陽成天皇の勅願道場として聞える本堂があり、その隣の寶物館に入ると、

一、後奈良天皇宸筆女房奉書一幅　一、後陽成天皇綸旨一通（本妙寺日眞上人宛、勅願寺綸旨慶長十年六月廿四日　頭右中辯奉）

一、清正任官宣旨（慶長八年五月廿五日）　一、清正筆蹟一幅（ゆめの事）

一、豐臣秀吉朱印狀高麗國禁制（天正廿年正月日）　一、安南國大都統宣書（弘定十年五月十七日　弘定十一年五月十四日）　一、朝鮮王子大官來簡一幅（蛮曆廿一年六月初二日　順和君、臨海君、抑花）　一、開山日直上人清規條目一幅

（干時天正十三天戊子霜月十五日云々　新記慶長五天庚子霜月十五日）

一、大明地圖一幅（天正二十年正月朝鮮役起るや秀吉が清正を召し親しく授けしものと云ふ）

一、細川三齋筆蹟　一幅　一、大阪地圖（天正二十年正月）等が目についた。此の見學最中に、豫て山陰御旅行中の西田先生がお見えになり、急に我々は京都と熊本の距離が短かくなる樣な歡びと共に後半の旅行日程は更に意義深いものとなつた。西田先生を加へ一同館内を出て藤崎八幡宮へ着いた頃多の日は漸く暮れ始めてゐた。參拜後、宮司の御計ひにより電燈の下で文書を拜見したが、整理されてあるものは武家文書（三卷）造營文書（二卷）、補任關係文書（一卷）、祭事關係文書（一卷）、神龍院以下書狀、由緒文書等多數に亙り一時間餘、急ぎ乍らも興趣深く見る事が出來た。採り得たものの中若干を示せば「武家文書」には、一、淡路守祈願狀

一通（至德四年六月二十日藤崎社人中宛）一、藤崎供僧神官言上一通（康應元年六月日、將門誅伐の時に建立の緣起應安年中回祿の事を記す）、一、八幡藤崎宮番次第定一通（文明四年壬辰四月十五日）一、早岐山城守祈願狀一通（文明九年二月九日）一、宇佐公員定書（天文元年壬辰三月十七日八幡宮社領事定武運長久祈願事）一、大友義鎭書狀一通（三郎丸治郎丞宛、藤崎社家職事）一、大友義鎭書狀一通（十一月九日宮司以下連名宛、社領の事、祭祀を怠慢なく行ふべき事）一、爲幸松丸祈禱狀一通（文明九年二月二十九日山城守坊政より三郎丸藏人大夫宛）一、八幡五所宮肥後國藤崎宮社司神官等證解（正平十二年十一月日）、一、藤崎宮上葺之事（六月二日山田山城守宛、重朝花押）等である。

尙、「祭事關係文書」では、一、八幡宮神事乘馬差出神馬事　一御みこしかきの事　一、寛永十年正月十九日付八幡藤崎宮祭次第之事　一、年中行事斷簡（頭部及九月以降缺文）　一、百町會之次第（十番迄記す）　一、放生會御祭之次第（德川初期と推定さる）

次に「補任關係文書」では、一、橘政熊注進狀（正安元年六月日）一通　一、僧道圓補任狀（延慶二年二月二十三日）一通（藤崎社御葺車別當職事）一、橘能成讓狀（元弘三年三月十日）一通　一、同（嘉慶二年四月廿五日）一通

「造營文書」に於ては、

一、藤崎宮造營記（大永二年壬午四月三日）一、八幡藤崎五所別宮肥後國藤崎宮社司神官等證解　一、肥後守藤原武光書狀（正平十二季十一月十七日進上御奉行所）一、正和元年三月二十七日院宣（寫）一、嘉禎四年六月十六日大辯官宣旨（寫）一、元德二年八月十日修理亮執達狀

亦、「由緣文書」を見るに、一、後奈良天皇綸旨（享祿二年八月二日）一、後奈良天皇女房奉書（享祿二年八月七日）（端裏書、勾當內侍）

一、後奈良天皇女房奉書（端裏書　天文十一年六月三日）

扨、八幡藤崎宮神像に關する文書を見るに、

八幡藤崎宮去年二月廿四日御假殿炎上之時燒失し給ふ御神體註文の事

合

大宮殿

一宮　御長三尺　錫杖　僧躰
二宮　御躰三尺　寶冠　俗躰
三宮　御躰三尺　連花　女躰

若宮四所

二所　御長二尺　笏　俗躰
二所　御長三尺　　童躰

右註文如件

正和元年七月日

（端裏書、御身體註文案）

そこで燒失以前の寶物なる御神像、木彫僧形八幡神坐像、木彫女神坐像を拜觀させて戴いた。

當社を辭し、とつぷりと暮れた夜を徊いて水前寺成趣園に至

り、池畔の古今傳受の間を拜觀せんとしたが時間の都合に依り中止し、出水神社に詣り、名園の面影を閣の中から推望し、坊中行の時間迫る驛へ急行した。驛からは平山副手も參加し、他方松山先輩に別れて一同阿蘇ホテルに到着湯を浴んで落ち着いたのはかれこれ九時をすぎてゐた。鳥取から西田先生の御持ち下さつた銘菓を戴いて和かに坐を圍み、話もはずめば、西田先生は皇紀二千六百年奉祝會の事業として行はれた神武天皇御聖蹟調査の委員として調査に當られた折の同顧談をされて國史の尊嚴さとその研究の重要さを御話あり、皆、夜のふけるのも忘れて傾聽し、教室の講義では得られぬ學問的に貴く樂しい時を過した。

第六日（十二月二十六日）　阿蘇　高千穗

午前八時五十分發、バスにて阿蘇神社へ向ふ。阿蘇の噴煙を遠望しつゝ山麓に雄大な景色の展開を見乍ら、阿蘇神社に到着、からりと晴れた冬の朝は昨日と異り寒氣が肌に感ぜられる。そのかみ吉野時代の阿蘇氏の勤皇事蹟を偲びつゝ一同參拜、こゝでは時間の都合上殘念乍ら充分阿蘇文書を拜見出來なかつた。

史料としては概略、一、延元二年三月朔日綸旨（左中將花押）一、元弘三年十月二日綸旨（式部少輔花押）一、延元五年三月四日綸旨（右中將花押）一、元弘三年十月二日綸旨（式部少輔花押）一、御例祭神幸行列圖繪卷一卷（明治三十八年村上長坊筆）一、古墳出土品（宮地古城中道等中心阿蘇谷一帶古墳群出土）、直刀鐵劍二口、鐵製鏃一、祝部土器（俵壺）土師器（高杯）等　一、國寶牡丹作短刀（無銘）一口（菊地武光奉納）一、國寶糸卷大刀一口（文永年間備前長光作細川越中守忠利奉納）阿蘇神社を辭して徒歩、宮地驛へ、こゝから立野へ引き返へし吉本、松村兩先輩とも御別れして車中晝食、高森驛へ着いたのは午後二時、こゝから約二時間バスに搖られ山岳を縫つて高千穗へ向ふ。千木をおいた民屋が車窓に展開されるとまもなく昨年末の火災の跡なほあたらしい高千穗町に入つた。旅館にて西臼杵支廳長、町助役等の御出迎をうけて少憩、助役の御案内で一同高千穗峽へ行く。高千穗町三田井の町を約十五分、千木を載せた民屋を眺めつゝ、向山街道へと進めば忽ち壯大な谷へと這入つて行く。斷崖空を蔽うて昏く、くの字曲りの崖壁の間を縫うて下れば壁下迸る飛泉の湛へて池をなす處は忍穗井で、その漂り落ちる邊は眞名井の淵である。此の傳說的奇勝に茫然としてしばし佇む。夕闇迫る中を歸路に向ひ、高千穗神社（十社大明神）に參拜する。

旅館では夕食の後、高千穗神社神主の方の御厚意により御持參の文書其他を拜見した。先づ民俗的な史料としては、一、神に神酒を供へるもの（かけぐりと云ひ篠竹にて作る）　一、アハギ（粟木）一名、雨ふらしと云ひ、來年作るまで一年中あげておく。一、神樂の太鼓の撥（廟殿にて作りしもの）。一、火口繩（ナバと此の地方では云ふが大抵椎茸を用ひる）。

次に高千穗神社文書を拜見する事が出來た。一、有馬四郎左衞門、有馬作太夫祈願狀（文祿四年三月十六日、東作右衞門宛）、一、十社大明神覺書（明應三年八月十一日、明應五年丙辰七月吉日天文十年等の社領の事を書きあげたもの正德二年辰十二月十六日（神主の家）田尻隱岐守より寺社奉行宛）以上一卷、一、建長六年四月廿六日鎌倉幕府下知狀

（寫）（熊野山領地に就ての進士五郎高村と高知尾三郎政重との爭論の事）一、正和三年四月日預所地頭浦上法橋覺瀧淨念陳狀　一、正和三年六月十六日下文（神主むねしけの袖野木屋敷の事を文永十二年の下文に從ひ相違なく進退すべき事を云ふ）一、建武元年十一月四日定則寄進狀　一、貞和三年十二月十六日大神惟成及惟親下文（十社大明神神主宛）　一、明應三年八月十一日付寄進狀（大神惟治、大社宣命宛、彼岸燈明料の寄進）一、明應五年丙辰七月吉日右武祈願狀（弓矢之宿願）一、天文廿二年十月吉日大神親氏鎭武祈願狀（田尻俵右衞門宛）一、天文七年乙卯十二月廿七日親貞、寄進狀（丸小野權現へ祈願のため）一、鎭安書狀（田尻出雲守宛）一、大神長武下知狀（袖野木野神主宛、十二月廿一日付）「以上一卷」二、延寶四年丙辰歲五月十四日遷宮の棟札　一、同　遷宮記錄　一、十社大明神御神體彩色書付（十社、（十柱）につき各々詳しく記す）一、日向國高千穗串振起奥書、時惟元祿七甲戌年孟夏下澣從五位下壹岐守源朝臣直次家士岡田新右衞門定賢謹而記す）一、神樂聖經　一、十社明神記一帖（建武五年三月十八日檜丁擬花押）一、神明帳一册（延寶二年甲寅十二月廿八日）一、日向襲高千穗神代圖（嘉永六發丑六月、羽黑、宮神主黑木重政謹述）一、日向國高千穗八十八社御鎭座圖　一、高千穗嶽不蒔田稻穗（表書、文政十二年丑九月吉祥日）

次はヴイクターレコードに吹きこまれてある高千穗の神樂せり唄、刈干切唄、稗搗節を聞く。神樂せり唄は祭りの氣持を刈干切唄は廣い山野に大鎌を振ふ音と動作に合せ稗搗節は山里に稗つく動作と心に合せて男女交互に歌ふ。我々聞くものの胸には悠暢なリズムが快く走る。之が終ると、再び西田先生を中心とし、高千穗町役場其他町内鄕土史家の方々五名餘り、との間に活潑な座談がはずみ一同樂しい時を過した。

第七日（十二月二十七日）　高千穗

最後の見學日である。空は小雨もパラつきさうな曇り日である。此日は、昨晩延岡より御來高の先輩松本博、林敏雄兩氏も行を共にされる。バスにて先づ天岩戸神社へ參拜してかねて期待してゐた神樂を見せて戴くこととなつた。一同參拜をすませる。境内の傍の大きな木は招靈の木と云ひ、太古祭時に齊木として用ひ神靈を之に降して祀つたものだと云ふ。拜殿を廻れば後は谷で、こゝをへだてゝ注連繩を張つた天の岩戸が樹木と樹木の間の彼方に拜まれた。拜殿の右には神樂殿がある。こゝで神樂を見る。神樂は三十三番あるが、その中見たものは數番である。太鼓二人笛一人が右側に在り、各々白衣、薄茶の狩衣類に赤い鉢卷の衣裳である。直徑二尺五寸あまりの太鼓に之を叩くは昨夜見た麻殼の撥である。先づ一人の男（白衣に薄茶の袴）が鬼面（相當大にして薄茶の長い髮あり）をかぶりて舞ふ、手力雄命の舞である。動作は可成斷續的で荒い。手には初めに棒の兩先に御幣のついたものを持ち、次は長さ約六尺の白布を持ちて舞ふ。最後に中央に置いてある紙で張つた黑い戸板（岩戸）に手を掛ける時、笛を吹いてゐた者は唱へ歌ひ、手力雄命は岩に手をかけこれを荒々しく外に放る。次は女面（可成精巧）の人物（白衣に薄茶狩衣の袖、頭は赤い頭布をかぶる）が手には鈴を持ちて舞ひ、次に槍を持つて速く細かく

歩きしなやかに兩手を大きく前後にふつて舞ふ鉏女命の舞である。次は伊勢神樂で矢張、男舞一人で手には左に鈴と右に御幣をもち、背、腰には御幣をさして舞ふ天兒屋根命の岩戸開き準備の舞である。最後は、弓正護の舞で今度は男二人である。白襷をかけ、右手には鈴、左手に弓と矢二本をさげ、二人調子を合せて歌ひつゝ惡魔を拂ふ舞である。

終りに當り舞つて下さつた方々に我々の祭壇で祭の當日は、神樂を見てゐるものが歌ふ神樂せり唄、を唄つて戴いた。唄ひ終る時、ヨイヤサヨイヤッサとのかけ聲も氣持がよい。此處にはまだ彌生式土器壺、甕、綫に重弧文、櫛目文樣ある土器。優秀な石斧、石一鏃、石小刀、銅製小刀があり、兩刃直刀の全身尺九寸七分、片面は扁平で合して一つとなる寶劍も、近隣の方の御意で拜見出來た。

次は四皇子峯に行く。途中、民家の屋上に破魔弓が立つてゐるのを見出した。四皇子峯は皇孫の宮居し給うたと傳へられる高天原につらなる高丘である。更に總觸神社に參拜した。天津彦彦火瓊瓊杵命以下數神を祀る幽靜な神域である。北方に聳ゆるは天香久山であると云ふ。此の神社より西方約二〇〇米行くと天眞名井があり、神代川のほとりに大きな檜の下から滾々と溢れる神代の傳說そのまゝの淸水に一同、心を淸めた。ついで高千穗町役場に到れば考古學の資料は相當富豐である。西臼杵郡出土西村巧氏出品の彌生式土器。鱗形文樣土器。繩文系土器。又、西臼杵郡田原村內倉氏出品のものには大形鐵鏃石鏃等多數あり、又櫛目文、竹管文、押型文樣の各種繩文土器精巧な磨製石斧（綠泥片岩大形）、更に勾玉、管玉の大形精巧あり、更に、此の地方の古代の考古學的發達も推定される。又、一、串振神社遷宮圖（元祿七甲戌天四月廿一日遷宮捧移成就畢）一、享保六辛丑年四月廿四日上野村神主田部家文書（寫）もあつた。やがて急ぎ旅館に引き返へして晝食をしたゝめバスにて日影驛へと向つた。延岡驛では京大文學部出身者の御出迎あり尙柴田先生は、一行より別れて南へ御旅行された。我々は此の日、夜七時別府米屋旅館についた。

第八日（十二月二十八日）　大分

昨夜はこれまで目まぐるしく過した旅行日程から解放され、溫泉にひたり、夕食後は西田先生を中心として座談に愉快な一時を過したが本日は朝食後、午後一時半別府發の航路迄の時間を利用して大分へ見學に行く事に相談が纏つた。先づ現在城內に位置する縣廳を訪うて觀光課の御厚志により、觀光印刷物を戴き、濠、石壘、櫓、樓門等の構造についてそのかみの御話を聞いた。かくして我々は再び別府に引き返へし晝食をしたゝめ流石に最早歲末の慌しさの感ぜられる別府の町を散步し、午後一時半、にしき丸に乘船、過ぎし旅行日程の數々の感慨に耽りつゝ別府に分れをつげ、一路、故郷で新しき年を迎へるべく歸路についた。

此の旅行中各地において貴重なる史料見學の便宜を賜はつた社寺、諸家、また御多用中わざ〳〵御案內頂いた先輩諸氏に深甚の謝意を表してこの記事を終ることとする。（北原一敏記）

會報

◇會員動靜

◇入會

京都市左京區吉田近衞町九　朝永陽二郎氏
同　上京區小山東花池町八　三上正利氏
大阪府豐能郡箕面村櫻井　和田篤憲氏
京都市左京區田中高原町七〇　武田清氏
同　東山區清水四丁目一七〇　伴豐氏
大津市境川町四六　善野方　大島廣二氏
以上小牧實繁氏紹介
京都市下京區油小路花屋町上ル　高瀨健次氏
大阪市北區東野田町八丁目五四　林博一氏
ハルビン市馬家溝國立大學哈爾濱大學北方アジア研究室　右藤岡謙二郎氏紹介
文部省教學局指導部普及課　右外山軍治氏紹介
服部貞藏氏
右平山敏治郎氏紹介

◇寄贈交換圖書（五月現在）

北方文化研究報告第四輯　北海道帝國大學
日本諸學研究　一三・一四　日本文化中央聯盟
會報　一三・一四　中央文化研究會
勢陽論叢　第四輯　神宮皇學研究室
歷史と國文學　二四ノ三・四・五　太洋社
中國文學　七〇・七一　中國文學研究會
無閑之　五〇・五一　むかしの會
軍事史研究　六ノ一　軍事史學會
古代研究　一二ノ三　日本古代文化學會
蒙古　八ノ三・四・五　善隣協會
史學雜誌　五二ノ三・四・五　史學會
歷史地理　七七ノ四・五　日本歷史地理學會
社會經濟史學　十ノ一・一二・十一ノ一　社會經濟史學會
史學　十二ノ三　廣島史學研究會
人類學雜誌　五六ノ三・四　東京人類學會
考古學雜誌　三一ノ三・四・五　考古學會
文化　八ノ三・四・五　東北帝大文化會
國學院雜誌　四七ノ三・四　國學院大會
史迹と美術　十二ノ四・五　史迹美術同攷會
社會學徒　十五ノ三・四・五　社會學徒社
和紙研究　八　和紙研究會
史學　十九ノ四　三田史學會
史淵　二五　九大史學會
臺大文學　六ノ一・二　臺北帝大文學會
國民精神文化　七ノ三・四　國民精神文化研究所
東洋史研究　六ノ二　東洋史研究會
京城帝大史學會誌　十七　京城帝大史學會
哲學研究　二六ノ三・四　京都哲學會
紀州文化研究　四ノ四　紀州文化研究所
Harbard Journal of Asiatic Studies Vol. 5, 6. 1941.　Harvard-Yenhing Institute.